



オルガンの未来へⅢ ～西洋から日本への架け橋～

interview

大木 麻理

楽器の王様パイプオルガンの長い歴史と新しい姿を聴かせてくれる「オルガンの未来へ」。
第3弾の2017年は、企画審査によって選ばれたオルガニスト大木麻理さんのプログラムによる演奏会です。
プログラムに込めた思いと聴きどころ、そして新作について、大木さんに語っていただきました。

ループする西洋のオルガン音楽

いにしえの時代から始まったオルガン音楽は、リゲティで現代音楽としての可能性が開いた、というイメージが私にはあります。「オルガンの未来へⅢ」の前半は、連続と続く西洋のオルガン音楽の「つながり」を表すプログラムを考えました。バツハの曲を「前奏曲とフーガ」などではなく「パッサカリア」を選んだのはそのためです。パッサカリアとは、低音のモチーフが繰り返される曲。「つながり」をイメージさせる曲だと思いました。「パッサカリア」が「ループする」さまを感じてください。

「ヴォルミーナ」から広がるプログラム

2016年はリゲティ没後10年。そこで彼の「ヴォルミーナ」を、ミュージアの音響空間でぜひ演奏したいと思いました。

「ヴォルミーナ」は、たくさんの鍵盤を腕で同時に押さえて鳴らす「音の塊」(トーン・クラスタ)による作品。メロディもリズムもない曲で、初めて聴く人はビックリすると思いますよ！通常の演奏会とは全く

違う世界に出会っていただけるはず。

さらに、リゲティでもう1作品、「リチエルカーレ〜G.フレスコバルティへのオマージュ」を選びました。これはバロックの作曲家フレスコバルティの「クレド」の後の半音階的「リチエルカーレ」を基にした曲なので、原曲も演奏します。

また、リゲティに作曲を習ったサットマリーの作品も演奏します。オルガンの新たな可能性を聴いていただける曲です。

日本のオルガン文化を作るために

私がドイツ留学中に感じたのは、ヨーロッパの膨大なレパートリーの中で、日本人作品が演奏される機会がごくわずかだということ。私たちの世代が日本のオルガン文化を作っていくかきや、と強く思いました。そこで演奏会後半は、日本の新しい音楽を取り上げます。

公演の題「西洋から日本への架け橋」は、西洋で育ったオルガン文化が、どのように日本に引き継がれ、発展していくか、オルガニストと作曲家が共にその可能性を模索する機会になったら、との思いを込めました。

プログラム前半の西洋、後半の日本の「架け橋」となる作品が、日本の

現代音楽を牽引する作曲家のひとり、伊左治直さんの「橋を架ける者」です。中世的な響きのする素敵な曲で、ポジティブな響きで演奏します。

作曲家・松下倫士さんは……

この演奏会のために2曲の新作を作曲してくださる松下倫士さんは、私の芸大時代の同期生です。彼は大学の副科がオルガンで、演奏がとても上手。学生の頃から「いつかオルガン曲を書いてね。私が演奏するから」と話していて、今回ついに実現します。

能とモーツァルト 趣の異なる2作品を新作初演！

松下さんの作品のイメージは「いろいろな顔がある」。今回の2作品も全く違う顔の曲になりそうです。ひとつは「日本的なものをテーマに」とお願いしたところ、彼は「道成寺」を題材に選び、「悲歌」を作曲しました。ミュージアのオルガンにある尺八の音色も使うようなので、日本的な響きの曲になると期待しています。

もうひとつは「みんなが知っている主題を使った聴きやすい曲を」とお願いしてきたのが「モーツァルト

トの主題によるパラフレーズ」です。モーツァルトのいろいろな曲が登場する作品なので、お楽しみに！
オルガンの新たな魅力を 楽しんで！

「オルガンの未来へⅢ」は、オルガンの新たな魅力、聴き方を発見できるプログラムです。現代曲に堅苦しさはありません。どうぞ気楽に足を運んでください。新しい響きが生まれるその空間、その瞬間にぜひ立ち会ってください！



西洋から日本への架け橋

ホールアドバイザー 松居直美 企画

オルガンの未来へⅢ

2017 2/18 土

15:00開演

パイプオルガン:

大木 麻理

料金 ¥3,000
¥2,000

- J.S.バツハ:パッサカリア 八短調
- G.A.フレスコバルティ:クレドの後の半音階的リチエルカーレ
- G.リゲティ:リチエルカーレ ~G.フレスコバルティへのオマージュ
- G.リゲティ:ヴォルミーナ
- Z.サットマリー:バツハへのオマージュ
- 伊左治直:橋を架ける者
- 松下倫士:モーツァルトの主題によるパラフレーズ (世界初演)
- 松下倫士:悲歌 ~能「道成寺」の物語による幻想曲 (世界初演)

※第2部冒頭に、出演者・作曲家によるトークもご座います。松居直美(ナビゲーター)、大木麻理、伊左治直、松下倫士